

キレイごとで何が悪い！

～障がい者になって分かった

幸せになるための 25 のルール～

株式会社 K&E 代表取締役

加藤 和紀

「何不自由なく育ったお坊ちゃま」。私のことをそう思う人は少なくない。

裕福な家庭に育ち、有名大学を卒業し、会計士を経て親の会社を継ぐ……。

私の人生の前半は、おそらく誰もが羨むようなものだったはずだ。

しかし、私は言いたい。財産・学歴・地位を有する人間を羨むのは良いが、それが無いことと、自分の不幸せを結びつけることだけは止めた方が良い。

なぜなら、当時の私は心から幸せを感じたことなど、一度たりともなかったからだ。それどころか、死にたい気持ちになることすらあった。

贅沢だと言われれば、確かにそうかもしれない。

だが、自分の本心と真摯に向き合ってみてほしい。「生まれてきたからには、何か手応えを感じながら命を輝かせたい」と願っている自分は居ないだろうか？ にもかかわらず、目先の娯楽や快楽で気分転換をして現状維持の人生で終わろうとしていないだろうか？

人生は本気で生きた者が勝者である！

お金を持っている者が勝者であるとしたら、それは本気で「お金持ちになりたい」と思い、お金持ち

になるまで本気で取り組んだ場合に限る。そういう意味で、かつての私は人生の敗者だったのだ。

そして自分の中に核となるものがないまま、私は25歳で多発性硬化症という難病とともに生きることが余儀なくされる。

多発性硬化症にはいろいろなタイプがあるが、私の場合、発作がないまま進行し徐々に体の自由が奪われ、いずれは寝たきりになるという珍しいものだった。

病名を告げられ、不安と恐怖で眠れない夜が何日も続いたが、その一方で、心の奥底から言いようのない妙な希望が湧いてきたのを今でも鮮明に覚えている。

私の人生の敗者復活戦はここからはじまった。

今、私は車椅子の生活で、人の助けがなければ何もできない状態にまで病気は進行している。ところが、病気になる前よりずっと幸せだ。

それは、障がいを持つて生きること、人間を人間らしくするものがなんであるかを知ったからである。数ある生き物の中で、誇りを持つて生きることができるのは人間だけなのだ。

私は障がいがある身となり、自分では排泄もままならず、惨めな思いを幾度となく味わった。この体験から、人間の尊厳について真剣に考えることになる。

そして「障がいのある人が自分に誇りを持つて生きられる手助けがしたい。そこに自分の命を使おう」と本気で思うようになり、はじめて自分に誇りが持てた。

皮肉な話だが、体の自由を失った時、ようやく欲しいものを手に入れたのだ。

私が欲しかったもの。それは誇りである。

人生という旅路は乗り物に乗って早く遠くに行つた者が幸せではなく、誇り高く生きてきた者が幸せなのだ。そのためには、自分の足で本気になつて歩くことだ。

愚かだと思ふかもしれないが私は、肉体的に歩くことと、自分の人生を歩くことが入れ替わつた時、生きるということの本質が分かつた気がする。

人はよく「健康なだけで幸せ」と、ありきたりな言葉で自分を納得させ、本気で生きることを放棄する。

私も、両親と二人の兄が揃つて医師という環境にあり、健康の大切さは十分に知っているつもりだ。もちろん、健康の価値を否定する気など毛頭ない。

しかし、本気で生きない言い訳に使うのはみつともない話ではないだろうか。

本書は、生きることにくソ真面目に取り組む中で感じたことを綴つたものである。したがって、内容は極めて個人的な見解だ。

しかし、人にとって共通の苦悩とされる「生老病死」に対するヒントが見つかるに違いないと自負している。